

お茶の水女子大学履修生受講感想

お茶の水女子大学大学院 博士前期課程
ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース 1 年
高田 千尋

AIT ワークショップに参加して



私は今回、タイへ行き、現地での研究や交流を楽しみにしていたので、タイへの渡航ではなく日本でのシンポジウム開催という内容になったと聞き、大変残念に思っていました。しかし、結果的にとても良い経験になったし、何よりも様々な方との繋がりが生まれて多くのことを得ることができました。

今回のテーマは「災害とジェンダー」。2011 年、日本は東日本大震災に見舞われ、タイも大洪水で大きな被害が出ました。今回の開催地が日本になったのも、洪水によって A I T 大学施設が受け入れ不可能となったためでした。共通項は「災害」。私は、「顔の見える C S R 元年」「寄付元年」と言われた 2011 年の東日本震災における企業の C S R 活動を、事例を中心にまとめていくことをテーマとしました。

このプログラムでは、シンポジウムでの報告へのプロセスとして、多くの外部講師の先生方に講演していただきました。この方々のお話がとても刺激的！！みなさん現地での支援経験や震災で被災された方と直接の関わりを持ち、魅力的な方ばかりでした。特に、最初に講演いただいた雁先生からは今でもよくご連絡をいただきます。雁先生は東京に避難している方の支援を行っていらっしゃる、縁あって今では私も支援活動の一部をお手伝いしています。そこで痛感するのは、災害等の非常時にこそ行政や地域社会など人の繋がりの本質が問われるということです。今回の自身のテーマには直接は結びつきませんでしたが、大きな気づきとなりました。

さて、発表の方は、企業の特色ある C S R 活動をレビューし、C S R 活動全体の傾向を捉えることを目標としました。ここでは企業の C S R 活動として多くの支援が被災地に届けられたこと、また、その支援のうち、「現場視点」であったり、「個人のニーズ」に即応するものである事例を挙げ、C S R 活動が変化・発展しているということを導きました。各事例は大変興味深く、「企業」という組織ならではの、変化の速さを感じるものでした。

この研究をする中で学んだことは 2 点あります。まず、調査と支援は一体であるべきだということです。これは、ご講演いただいた池田先生がおっしゃっていたことです。調査にも様々な方法がありますが、単に調査するだけではなく、「その問題に直接関わり不利益を被っている人の支援をする」という考えがなければ調査も目的を失ってしまいます。

また、二点目に、研究報告の方法論です。短期間ではありましたが、テーマ設定や文献リサーチ、そこからの分析など、一つの研究としてまとめるために必要なことを実際に経験することができました。

もちろん、今回積み残した点や発表して皆様からいただいたご指摘などはたくさんあり、課題として残っています。「個人のニーズに着目すること」や「現場視点」ということを結論で導きな

がら、研究方法ではその点を生かすことができませんでした。この点を踏まえつつ、修論に向けた今後の研究を進めていきたいと考えています。

最後に、途中、心が折れそうになるところもありましたが、最後の発表まで終えることができたのはコーディネーターのお二人をはじめ、共にプログラムに参加したメンバーがあってこそのことです。この経験を論文執筆や今後の活動に生かしていこうと考えています。本当にありがとうございました。

.....

お茶の水女子大学大学院 博士前期課程
ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース1年
スタンナード・ポリー

2012年2月29日 AIT☆お茶大共同ワークショップ
「Gender and Disaster : Responses from Young Scholars」参加に関する感想文

先日、「Gender and Disaster : Responses from Young Scholars」にご参加していただいた方々にお礼を申し上げます。ワークショップの手配にご尽力くださった IGS ジェンダー研究センターの先生方、IGS 事務局の方々など、本学の皆さまに感謝の気持ちをささげます。特に、博士課程の先輩方のご厚意とお力添えに感謝しております。いろいろお世話になりありがとうございました。また、今回のワークショップにご参加するためにはるばる日本までお越しにくださった AIT アジア工科大学院大学の皆さまにも厚く感謝の意を申し上げます。



皆さまのおかげで、とても有意義で充実したワークショップになり、楽しく興味深く参加させていただいた。特に、NPO 法人ハーティ仙台(Hearty Sendai)八幡悦子さんのお話を興味深く聞かせていただいた。八幡さんは、まず東日本大震災を体験されたご本人の経験話について参加者に披露した。例えば、役に立った物、不足した物、ご自宅に備蓄があり震災直後に活躍した物などについてお話をいただいたが、今回の大震災を周辺から体験した私にとって将来いつか役に立つような情報や知識を数々頂いたと思う。

八幡さんのお話を聞いて、私は地震、津波、原発事故など震災によるあらゆる種類の不測の実態に対して事前の準備をすることの大事さを身に染みて感じた。しかし、「準備」というのは、震災時に役に立つ備品などの「物の準備」だけではなく、住民たちの知識および訓練など「心の準備」も含まれるのが何よりも肝心であると思われる。例えば、八幡さんの発表で、母子保健指導で、地震対策は指導していたが、津波対策の指導はしてなかったというお話があったと思うのだが、もし、「大きな地震があったら、迷わず高いところへ!」「戻らない、命より大事なものはな

い！」という知識が人々の頭によりたたき込まれていたら、今回の大津波で多くの命を救ったのではないか。特に、子供たちは若くて健康で、速く走ったり山を登ったりすることができるから、津波が発生した時、迅速に対応すれば生存の可能性が高いと思われる。しかし、適切に反応するためには前もっての「心の準備」が必要である。従って、このような例は、震災前に、精神面での「準備」をきっちりと整える必要性を浮き彫りするように思える。

また、「日常的に男女平等意識が推進されていないと、震災時は閉鎖的家父長制の意識が支配する。」ということがその通りだと思う。東日本大震災においても、女性は避難所の運営や復興活動など意思決定やリーダーシップ・ポジション（指導的地位）から除外されてしまったことが多かったらしい。震災時、当面の物質的ニーズが優先され、ジェンダーやセクシュアリティ、男女平等への要求などが「二の次」となってしまう。これは「緊急の暴政」(tyranny of the urgent)という表現でよく示されている。このため、震災前に、男女平等への意識を促進することが非常に重要であるということは、八幡氏の言葉のとおりだと考える。

八幡さんの最後の言葉も私にとって特別な響きを持った。「それぞれがそれぞれの関係で、できることをやる。対象はあまりに広域で膨大、前例はない。試して、次を考えてゆく。」震災時、自分がどうやって貢献できるのかが分からなく迷ってしまうことが多いだろう。しかし、八幡さんの言葉が示唆するように、震災時の支援というものは、まず自分にできることから始まり、それから自分にできそうなことを次々とやり続けるだけだ、ということだと思った。今回の東日本大震災は特に想像がつかない、大規模の出来事であり、それにどうやって対応するかを教えてくれる前例がないかもしれないが、まず目の前にあることから試して、探っていくのがポイントなのではないか。

今回のワークショップでは、八幡さんのプレゼンテーションをはじめとして、AIT 教員の事例報告、他の学生参加者の皆さまの非常に魅力的で価値あるご報告を聞かせていただきとても幸運に思う。今まで日本を専攻してきた私にとって、国際的な視野から災害とジェンダーについて議論をすることがとても貴重な経験だったと考える。特に、タイの学生と会い一緒に仕事をするのは素晴らしい機会だったと思う。彼らとの交流を通して、私は日本以外のアジアの国に興味を持つ大きな機会を得たと思う。国際的に見て、日本のような先進国であれ、タイやラオスのような発展途上国であれ、災害においてジェンダーの重要性が変わらないということは特に印象に残った点だった。また、このワークショップに参加することで、私は性的マイノリティと災害との間に新しい関心領域を発見したが、今後の研究を方向づけ、大きな刺激になっていくだろう。

最後に、あらためて、今回のワークショップに関わってくださった皆さまに心からお礼申し上げます。ありがとうございました。